

会 議 録

1 会議名

平成 30 年度第 2 回上越市食育推進会議

2 議事（公開・非公開の別）

（1）平成 30 年度上越市食育推進実施計画（アクションプラン）進捗管理について
（公開）

（2）第 3 次上越市食育推進計画指標項目の取組状況について（公開）

（3）意見交換

3 開催日時

平成 31 年 2 月 5 日（火）午後 1 時 30 分から 3 時 30 分まで

4 開催場所

上越市役所 401 会議室

5 傍聴人の数

0 名

6 出席した者（傍聴人を除く。）氏名（敬称略）

・委 員：高橋慶一、野口孝則、池嶋聖也、上野則子、藤田芽美子、岩崎洋一、笹原絢子、
山本敦子、小林小枝子、樋口聖子、平澤栄一、松井和代、西舘茉侖、渡辺晶恵、
近藤直樹、柳澤祐人

・事務局：農村振興課：桐木課長、沢田副課長、谷川係長、北山主任
健康づくり推進課：大石栄養士長、保育課：井守栄養士長、農政課：太田副
課長、教育総務課：塚田副課長、学校教育課：手塚副課長、社会教育課：福山
副課長、上越ものづくり振興センター：山中副所長

7 発言の内容

(1) 開会

事 務 局： ただ今から、平成 30 年度第 2 回上越市食育推進会議を開催いたします。

本日、司会を務めます事務局の農村振興課の谷川でございます。よろしくお願
いいたします。

本日の会議ですが、井上委員、坂口委員、吉村委員、松原委員から、事前に欠
席の連絡をいただいております。

なお、上越市食育推進会議規則の第2条第2項の規定では、委員の半数以上の出席がなければ会議を開くことができないとありますが、本日は、委員の半数以上の出席がありますので、会議を開催できますことをご報告させていただきます。

まず、議事に入ります前に、会議資料の確認をさせていただきます。お手元の配布資料一覧にございますとおり、先日お送りしました「次第」「食育推進会議委員名簿」のほか、「資料No.1から資料No.4」と、前回会議でお配りしました「第3次上越市食育推進計画」及び「アクションプラン」につきまして、本日ご持参いただいておりますでしょうか。

また、本日配布させていただきました資料「座席表」をお配りしておりますが、過不足等はないでしょうか。お持ちにならない方はお申し出ください。

それでは、開会に先立ち、会長からご挨拶を頂戴したいと思います。野口会長、お願いいたします。

野口会長： 年度末になりまして、今年度の上越市の食育推進のまとめとして、皆さんのご意見を賜りたいと思います。後ほど、事務局から進捗状況等を報告いただきますが、皆さんからもさらに上越市の食育をどのようにしていったらいいかなどご意見をいただきたいと思います。本日も活発なご議論よろしくお願いいたします。

事務局： 野口会長ありがとうございました。

本日の会議は、午後3時30分が終了予定時刻となりますので、委員の皆様のご協力をお願いいたします。

なお、本日の会議録は後日、上越市のホームページで公開されますので、あらかじめご承知おきください。

それでは、議事に入ります。これより先は会議規則第2条第1項の規定により、会長が議長を務めることとなっておりますので、野口会長よろしくお願いいたします。

野口会長： 今ほど、事務局より説明のありましたとおり、しばらくの間、議事を私の方で進めさせていただきます。よろしくお願いいたします。

それでは、お手元の次第に沿って進めさせていただきます。次第の3(1)平成30年度上越市食育推進実施計画(アクションプラン)進捗管理について事務局説

明をお願いします。

事務局： 農村振興課副課長の沢田と申します。私から説明をさせていただきます。

はじめに、私から概略を説明させていただき、委員の皆様からご質問等がございましたら、説明の後にお出しいただきたいと思います。

「資料No.1 平成 30 年度上越市食育推進実施計画（アクションプラン）」及び「資料No.2 平成 30 年度上越市食育推進実施計画（アクションプラン）進捗管理一覧表」を合わせてご覧ください。

資料No.1 では、各事業の目標達成状況、主な事業実績、今後の課題・反省点を記載しています。資料No.2 の進捗管理一覧表は、各事業の目標達成状況の結果を一覧にまとめています。

今回の結果は、各事業を通じて出された結果のほか、12 月に市民 3,000 人を対象に実施しました「食育に関する市民アンケート」の集計結果が基になっております。各事業直結の結果ではなく、「食育に関する市民アンケート」結果が目標の結果となっている項目がありますので、その点も踏まえて、ご覧いただければと思います。

今回は、限られたお時間ですので、それぞれの事業の説明は省略させていただきますが、基本方針別に目標達成状況が「△」、計画された事業に取り組ましましたが成果が不十分だったものについて、簡単に説明いたします。

第 3 次上越市食育推進計画の施策の実効性を高めるため、アクションプランとして、47 の事業を規定しています。

資料No.1 の 1 から 24 ページになります。推進計画の基本方針 1「家庭を中心に子どもの時から生涯にわたり食を通じた心身の健康づくりの推進」は 24 事業あり、そのうち、計画された事業に取り組んだが成果が不十分だった事業、「△」で表示しておりますが、13 事業となりました。特に、乳幼児期、成人期における適正体重の維持、全世代における食習慣、成人における運動習慣に関する項目、食に関する情報提供、啓発活動の項目で成果が不十分でした。

乳幼児期、成人期における適正体重の維持については、栄養バランスの偏りや食生活の乱れが要因と考えられるため、食習慣、運動習慣に関する項目と合わせ、各ライフステージの特性を踏まえ、様々な場面での健康教育に努めます。ま

た、食に関する情報提供、啓発活動については、情報発信の内容が具体性に欠け、継続的な提供ができなかったことが要因と考えられます。今後は、計画的かつ継続的な情報発信、啓発に努めます。

続きまして、25 から 29 ページをご覧ください。基本方針 2 「食育活動の推進による地域の食文化の継承」は 5 事業あり、全ての事業において目標を達成いたしました。このことは、後に説明いたします「資料No.3 第 3 次上越市食育推進計画指標項目の取組状況」の結果にも反映されております。今後も継続的に取り組んでまいります。

続きまして、30 から 37 ページをご覧ください。基本方針 3 「食育推進体制の整備と情報共有できる環境づくりの推進」は 8 事業で、「(5)-①食育推進関係団体との連携強化」の項目で目標を達成できませんでした。これは、具体的に上越の食を育む会の会員登録数を目標値としていますが、昨年度の団体数と同数という結果となりました。会の活動の発信を強化し、まだ参加していない市内の食育関連組織、団体に協力を呼びかけてまいります。

最後に 38 から 47 ページです。基本方針 4 「食育活動の推進による上越の農林漁業への理解の促進」は 10 事業あり、そのうち「(8)-①地域食材による給食の提供」「(10)-①環境保全型農業直接支払対策」「(10)-②桑取川魚の森づくり事業」の項目で目標を達成することができませんでした。

地域食材による給食の提供では、地場産野菜の納入体制は確立されてきており、前年度に比べ数値は上昇しています。生産量や品質、気象条件に左右されることもありますが、安定供給が図られるよう関係団体、生産者等に協力を引き続きお願いしてまいります。

環境保全型農業直接支払対策では多面的機能の重要性の周知、桑取川魚の森づくり事業ではより一層の事業周知により、関係者の協力を得て取り組んでまいります。

全体を通して、市民一人一人の食育の実践につながる項目が目標を達成することができませんでした。また、本日は目標を達成できなかった事業を中心に説明いたしましたが、目標を達成している事業もあります。次年度のアクションプランに反映させるためにも、本日の後半にあります意見交換の際に具体的な

方策をお聞かせいただければと思います。

私からの説明は以上となります。アクションプランの進捗管理につきましてご質問がありましたら、お願いいたします。

野口会長： ご説明ありがとうございました。では、委員の皆様方、ただ今の説明につきまして、ご質問、ご意見等がありますでしょうか。

岩崎委員： 活動の結果と成果、反省はあるのですが、今後の成果の維持として、歯止めの仕組みはありますでしょうか。

事務局： 全体的なことでもよろしいでしょうか。私どもとしては、各事業の目標値をクリアしていくことだと考えています。

平澤委員： 範囲が大きすぎて、質問も難しいですが、私は農業をしている側から、急速に上越市の農業生産者は減ってきています。その辺りはどのようにお考えでしょうか。農業は食育の根幹にあると考えています。子どもたちに農業の体験をさせないで、子育てする時代が何年も続いています。小学校で幾ばくかの農業体験をさせているようですが、時々講師で頼まれて行くのですが、これでは、農業を志す人はいないだろうと感じます。神奈川県から上越市に農業体験に来ます。1回しか来ないのに、結構喜んでもらっています。では、地元はどうなっているかという、何年生かに限ってやっているようですが、食育を土台にやっていると思うので、今後どうしたらいいか質問です。

事務局： 農業体験という点では、資料No.3にもありますとおり、食育の学習会を実施している小学校の数は、目標では全小学校、最新の実施数も全小学校となっています。基本方針3でも野菜や米作りなどの農業体験は全小学校で行っています。

今、平澤委員がおっしゃったとおり、それで十分なのかという点だと思いますので、後半の意見交換の中で議題の一つとしていただいてもよろしいでしょうか。教育委員会の学校教育、社会教育の担当も来ておりますので、後半の意見交換でお願いできればと思います。

野口会長： 私も同感です。後ほどの意見交換の中で今の話題は取り上げていきたいと思えます。私のほうから一つ質問してよろしいでしょうか。アクションプランの25ページ「郷土料理、食文化の普及」のところですが、今年度も昨年度も目標を達成し、順調に進んでいるようですが、ここには主な事業実績として回数が出てい

ます。例えば、他の指標のように、参加人数、どういう方が来ているのか、人生ベテランの方なのか、親子連れ、子ども同士なのか、対象者や参加人数が増えたなどの広がりが見えてくると良いと思います。具体的に広がりや質が高まるのが実感できる評価指標に広げていただけるといいと思います。

事務局： 社会教育課が担当となりますが、野口会長がおっしゃったことを念頭におきながら、指標の表示の仕方については検討させていただきます。

(2) 議事 第3次上越市食育推進計画指標項目の取組状況について（公開）

野口会長： 続きまして、次第の「3 議事(2)第3次上越市食育推進計画指標項目の取組状況について」、事務局から説明願います。

事務局： それでは、説明をさせていただきます。お手元の「資料No.3 第3次上越市食育推進計画指標項目の取組状況一覧」をご覧ください。

この指標項目は、基本目標であります「市民一人ひとりが自らの健康に関心を持って食を選びとっていき力を身に付ける」ことの実現に向け、4つの基本方針に沿って食育を推進する取組の成果を、客観的な指標で把握できるよう定めた目標値です。

最終目標は、推進計画最終年度の平成33年度となっておりますので、今年度の数値は、目標に向かう現状の数値としてご覧ください。

今回の結果は、今ほど説明しましたアクションプランと同様、各事業を通じて出された結果と「食育に関する市民アンケート」結果が基となっております。中には、アクションプランの事業の目標値となっているものもあります。

具体的には、基本方針1では、「朝食を欠食する市民の割合」、「ゆっくりよく噛んで食べる市民の割合」、「適正体重を維持している市民の割合」、「生活習慣病予防」、「家族との共食」、「地域での共食」の項目で策定時より結果が悪化しています。

基本方針2では、全ての項目において数値が上昇しております。

基本方針3では、「食品の安全性」に関する項目で数値が悪化しています。基本方針4では、「環境保全型農業の取組」に関する項目で数値が悪化しています。

それぞれの要因、改善点につきましては、先にご説明しましたアクションプラ

ンの進捗状況と重複しますので、説明は省略させていただきます。

現状の結果を踏まえ、アクションプランの各事業とともに、平成 33 年度の最終年度に向け、事業を推進してまいります。

野口会長：説明ありがとうございました。それでは皆さん、ただいまの説明につきまして、ご質問、ご意見等をいただきたいと思います。

樋口委員：新潟県歯科衛生士会上越ブロック長の樋口です。基本方針 1 の結果を見て、「ゆっくりよく噛んで食べる市民の割合」が軒並み下がっていて、平成 33 年度の目標値である 70%にこれから届いていくかという意見です。

よく噛めることは、歯が丈夫であることで、むし歯のない子が多くなっていますが、それとは反対に生活習慣病の歯周病が多くなっています。子どもだけでなく、大人も同じです。親の口の中が歯周病にかかっていると、子どもも同じ状態になってきて、そこから噛めない、軟らかいものを食べる、甘いもの、肥満傾向になるというような健康全体に関わってくるので、食育にも絡んできます。

私たちは、保育園の幼児期と高齢者に対し話ができますが、成人に話をする機会がありません。この世代に話ができれば良いと思っています。

事務局：健康づくり推進課の大石と申します。むし歯と歯周病の関係では、上越市歯科保健計画を改定しております。その中で、永久歯のむし歯は減少していますが、小中学校の段階での歯周病の判定率は、年齢が上がるにつれて増加が見られるという現状があります。そこで、まずは噛む事の臨界期である 2 歳くらいまでに、よく噛んで飲み込むことができるように適切な離乳食の進め方の支援を強化しています。また、離乳期の際のオーラルトレーニング、小さな頃から口の中にお母さんの手を入れたり、歯磨きに抵抗がないように口腔ケアの面でも強化をしています。

1 歳以降は、定期的な歯科検診とブラッシング指導、フッ素塗布、食生活改善の健康教育や健康相談を実施していますが、高齢期までの成人期の状況を歯科保健計画の中で取った状況としては、ちょっと似ているようで指標が違ってきますが、何でも噛んで食べることができるという指標項目があります。その状況を示しますと、67%の方が何でも噛んで食べることができる状況となっています。後期高齢者では、76.6%という数値が見られています。こちらの指標と違うところ

は、「ゆっくりよく噛んで」というゆっくりという視点も大事かと思います。成人期においては、歯科衛生士による歯周病予防講座を実施していますので、そちらのほうでも各地区単位で強化してまいりたいと思います。

樋口委員： 歯科衛生士の話は、成人とはなっていますが、実際の現場では高齢期に近い方にお話しをしました。

事務局： 市の健診ですと、実際に来られるのは、年代的に60歳代が一番多くなっているのが現状です。そちらも市民全体にも強化をかけていきますが、若い年代というと、親子という視点で、各保育園単位、乳幼児健診では、全ての保護者にお会いできますので、その際にも親子で一緒に取組んでもらえるようにしたいと考えております。

樋口委員： 市の健診にも関わっていますが、乳幼児健診には必ず親御さんがついでにきます。2歳児健診で親御さんの成人健診をした時に、ひどいお母さんがいました。そこで分かって、なんらかの動きが始まればいいと思います。

事務局： さらに遡ると、妊娠期の教室においても、妊婦さんとその夫という形で、これから子どもを育ていく段階から旦那さんも含めて唾液潜血検査を実施しています。胎児期から高齢期にかけて各種事業を通してそちらの視点を組み入れながら実施してまいりますので、ご協力よろしく願いいたします。

野口会長： 私が気になったところですが、アンケート調査の難しさがあると思います。毎年市民アンケートを取ると思いますが、同じ人に送っているわけではない。委員の皆様からのご理解いただきたい点ではありますが、同一人物に配布しているわけではない、つまり、去年と今年で結果が変わる、単純比較ができないということです。回答者の年齢構成も毎年若干変わり、若い人が中心となった年は、若い人中心の回答により傾きますし、一方で高齢者が中心となれば、そのような傾向になります。これは、研究者としても悩ましいところです。抽出アンケートの難しさだと思います。

上越市においても1,200人、100~200名程度でその年代を代表していますし、毎年若干変わっていきます。傾向として、年々どちらの方向に動いているか、そこは注意しなければいけないと思います。

岩崎委員： 50歳以上の回答者が50%以上を占めています。そうすると、不平等になりま

す。それぞれの年代で同じ母数で調べて分析したほうが、より真実に近いものが出てくると思います。

野口会長： 例えば、29歳と30歳、この違いを20歳代と30歳代とどんどん分けていってしまうと、母数集団が少なくなってしまう、統計的に難しいところではあります。

ちなみに、農林水産省の食育白書においても、数千人規模のアンケートで1億2千万人の代表数値となっています。この会議に限らず、上越市でも多くのアンケートを取られていて、その中の通常通りのアンケートの取り方をされているということで我々は受け取るしかないかなと思います。

事務局： 対象とする数は、庁舎内でのアンケートの中でも高いほうかと思いますが。50歳代で一括りにすると、人数が多くなってしまうのは、いろいろな場面で50歳以上の方の参加が多いことにつながると思います。本当に穴となってくるのが20歳代です。協力していただきたい世代ですが、難しいのが現状です。

野口会長： 後半の意見交換の中で、若い世代、20代、30代向けのアプローチを、特に食育は重要ですので、そこに向けてどうするかを語ってみましょう。

(3) 議事 意見交換（公開）

野口会長： それでは意見交換に移ります。はじめに事務局から説明をお願いします。

事務局： 「資料No.4 平成30年度食育に関する市民アンケート調査結果」をご覧ください。

上越市では、市の住民基本台帳に登録されている18歳以上の市民3,000人を無作為抽出し、食育に関する市民アンケートを実施しています。今回は、12月の22日間で実施し、回収数は1,210、回収率は40.3%となりました。

アンケート項目は、回答者の構成からはじまり、20項目を設定しました。項目内容は、食育への関心度や実践度、食品購入に対する意識等を伺っております。

結果はご覧のとおりです。アンケート調査結果ですので、前年度の数値と比較し、数値が大幅に減少しているものや増加しているものがありますが、今回の結果が現在の市民の実態であるとお考えください。

今回の意見交換では、先ほどのアクションプランの進捗管理や推進計画の指標項目の取組状況でもご報告しましたとおり、数字上ではありますが、例えば、アンケート項目「問7 普段の食生活の実践度」や「問8 栄養バランスに配慮した

食事の実践」など、市民の食育の実践項目において数値が伸びていない現状があります。

第3次上越市食育推進計画のキーワードは「実践の環を広げよう」ですので、委員の皆様から、ご自身のお立場から考えられる「食育の実践の環」を広げる具体的方策をお聞かせいただきたいと思います。また、ご自身の関係だけでなく、他の組織ができるのではないかとのご意見でも構いません。

また、今回の意見交換により、委員の皆様の中での連携が生まれる可能性もありますので、積極的な意見交換をお願いします。

野口会長： 意見交換は、食育の実践の環を広げるためにということが一番の狙いと定めまして、連携、実践の環の広げ方を皆様からご発言、ご提案いただきたいと思いません。

市民アンケートの調査結果を示していただきましたが、まず、市民アンケート結果について何かご質問はありますか。回収率が低いということは、そもそもアンケートに答える気がないということになります。回答してくださらない人が増えている現状も踏まえて、食育への意識、関心、興味が年々下がっているかもしれません。

まず、先ほどから出ています子育て世代と言われる20代、30代、40代に向けた上越市内の食育の推進について、皆さんの組織・団体、または個人としてどのような取組が可能であるか、皆さんに順にご発言をいただきたいと思います。

山本委員： 市民委員の山本です。アンケートの回収率について、若い人は食や食べること、栄養バランスに興味を持っている人が少ない、面倒くさいという気持ちがあると思います。協力してもらえらる企業にアンケートを実施してもらえば、回収率が上がると思います。

野口会長： その取組はすごくいいと思います。来年度市内3企業、5企業、モデル事業として行ってもらえるのもいいですね。

樋口委員： 若い世代は、未婚の方は当てはまりませんが、子どもを中心として、子どものこととなると、休みを取ってきてくれるので、保育園や小学校なり、その事業の最後にアンケートに記入するのがいいのではないかと思います。

松井委員： スポーツクラブを代表しています松井です。スポーツクラブでも20代から40

代のことを考えると何もできないのが現状です。本当に忙しいんだと思います。私もこのアンケートの結果を見て、ここが少ないなと思っています。統計調査の仕事もしてまして、この世代は、おばあちゃんたちに書いてもらうことが多いと思います。学校は学校で忙しい。家庭教育も学校が担っている状況があります。できれば学校は避けてもらいたいと思います。そうすると、企業はいいと思います。スポーツを企業でしましょうという取組もあり、スポーツクラブが企業に行き指導することもあります。企業的にはそういう目もあるかと思っています。

企業と食育という面では、小さい頃、父の会社で運動会をしたことを思い出しました。そういった形で、最近は運動会もないと思いますが、郷土食とかそういったものを出して、「今日お父さんの会社でお昼食べさせてもらうんだって」という感じでやってもいいのかなと思います。

西 舘 委 員： 上越教育大学の西舘です。若い世代と言われる 20 代、30 代は、自分の親を考えた時に、親は子育て真っ最中で、確かにじっくり考える時間、アンケートに答える時間がないのかなと思います。ただ、子どものこととなると、親は授業参観には来てくれていたので、授業の中で食育を考えたりすれば、20 代、30 代の意見も学校を通じて意見を聞けるのかなと思います。

学校も忙しいので、私が大学生活で思うことは、ボランティアに参加した時に、親子で参加するボランティアと一緒に料理をする機会もあって、食に関して親子で興味を持ってもらえたこともあったので、学校の場面を使ったり、学生も巻き込んで、ボランティアの形で食育に関する授業をしてもいいのかなと思います。

先日、地引網体験に参加させてもらいましたが、実際にやってみると楽しくて、大学生はアンケートに答えられないけど、体験してみるほうが、価値が大きいのかなと思いました。

近 藤 委 員： 農林水産部長の近藤です。行政の立場も踏まえまして、意見を述べさせていただきます。まず一点目、アンケートに関してですが、今回 3,000 人の抽出ということですが、野口会長からもおっしゃっていただきましたが、抽出のアンケートの限界があるかと思っています。若い方からの意見、実態を把握するには様々なツールもあるかと思っています。年代別の調査方法もあるかと思いますが、行政的なコス

トもありますので、現実的ではないのかなと思います。ネットを活用したやり方もあるかと思いますが、こちらはこちらで年代が偏るのではないかと思います。

今回のアンケートの結果を踏まえて申し上げますと、前回よりはその取組が成果につながっていないという実態が見受けられる、これは抽出のところで、前年の方と違う方にお聞きしていることで、数値が下がっている実態が結果として出ています。単年度で判断するのではなく、中長期的に見ていく必要があると思います。

アンケートの結果に戻ってしまいますが、項目が少し多いのかもしれませんが。取組に関して食育は範囲が広すぎて、どこからどこまでが食育の部分なのか、もしかしたら、「食育」という言葉にアレルギーを示している人もいるかもしれないし、それがアンケートの回収につながっているのかもしれない。

まずは、知ってもらうこと、実践につなげる方針がある中で、今後は、我々の取組、施策が皆さんの目に触れられるような形が必要です。我々の反省もありますが、食育のホームページを持っていますが、市のホームページは堅いところがありまして、どんどん深く掘り下げていかないと見つからない、今回、委員の皆様からご参加いただいておりますが、個々がやっておられる食育の取組みを連携してやっていく必要もあるかと思っています。簡単にいえば、ホームページにリンクを貼るところもあるのかもしれない。こういったことを市役所として考えていきたいと思っています。

柳澤委員： 教育委員会の柳澤です。率直に思ったことを申し上げて大変恐縮ですが、アンケートの結果で若い年代の回収率が少ない、どうしようかという方向で話は進んでいますが、アンケートの回収率を上げるという議論も大切ですが、1,210の方が回答していただいた結果がありますので、これはこの結果で活用していかなければいけないのかなと思います。

今、近藤委員がおっしゃられたように、そのアンケートの結果、取組とそれぞれに対する効果が出ていないという結果が出ています。それをどう対応したらいいかという議論に特化していったほうがいいと思います。アンケートの回収率はどんな手を使っても上がる時は上がるし、上がらない時は上がりません。

教育委員会としては、前段で話が出ましたが、食育の推進ということで、第2

次総合教育プランの中でしっかりと位置づけた中で、全小学校がやっている農業体験、学習会もやっているわけで、いわゆる義務教育世代にそういう場と環境を提供しつつ、関心と興味を持ってもらうことが人づくりになり、アンケートへもつながると思います。

当面、教育委員会では、今行っている、子どもたちへの食育、健康づくりも含めた教育をこれからも愚直に続けていけたらと思いますし、これによってうまく回っていくのではないかとも思いますし、少し長い目で見ないといけない取組だと思っています。

渡辺委員：今日は八木健康福祉部長が他の公務で欠席ですので、代理で伺いました福祉課の渡辺です。健康福祉部では、「基本方針1 家庭を中心に子どもの時から生涯にわたり食を通じた心身の健康づくりの推進」で動いている担当部門ではないかと思っています。家庭を中心ということですので、働き盛りの年代をターゲットにしていくべきかと思いますが、健診に来られる方はその次の年代の方が多いということで、担当課も若い世代にどのように関わるかが課題で動いています。

ただ、いろいろなところをきっかけに入っていければということで、今、小中学校児童生徒に血液検査を実施していきまして、その結果の説明等で保護者と一緒に子どもたちが健康教育を聞く機会を設けていますし、企業へも回って、食や生活習慣の話をさせていただいております。ただ、企業といいますと、時間でコストを考える部門ですので、市からは、人材が健康であることが企業にとってもメリットであるとお話させていただきながら、健康に働いていただくところから入っています。

若い人たちが自分の健康を考えるということは、痛くもかゆくもないのが生活習慣病ですので、入り方として難しい部分があるかと思っております。なぜ自分たちが今生活習慣を見直さなければいけないのか、ご自分の健診結果を振り返っていただき、今自分が何をすべきかを考える動機付けをすることが大切だと思っております。先ほどからいろいろな課題が出てきていますが、ただ「こういうことをすることがあなたの体にいいですよ」と言っても、いろいろな部分で健康情報がありますので、どの情報が自分に合っているか、自分の状態がなんの情報が必要としているのか、そこをきちんと結び付けていくことが大切だと考えてお

ります。全体の話の中で、必ず個の自分のこととして考えられる教育をしていく必要がありますが、なかなか難しい状況です。

若い世代は、学校、企業などの機会を得て、自分の健康と家族の健康と一緒に考えていただける世代でもありますので、そういう機会を得ながら進めていきたいと考えておりますし、委員の皆様からのご意見で、こういう所に行けば若い世代と関われるのではないかと、こういう団体に声をかけると、若い世代にアプローチできるのではないかなど、ご紹介をいただければありがたいと思います。

平澤委員：若い世代が食や健康に関心がないのは、私たちもそうだったので、普通のことかなと思います。食育は幅が広くてどこを捉えればいいのか難しいところですが、私の立場からいいますと、食を生産する、食べ物を食べないと人は生きていけない、命をいただく、といった生産の分野で食育を考えています。

私は直売所でヤギを飼っていますが、ヤギを見に来る人も多くて、その中に教員の方がいて、外国の方ですが、自ら田んぼをして子どもたちや親子に田植えを手伝ってもらってお互いに楽しんでいます。

私も孫にトマトの栽培を見せたり、収穫させたりしています。トマトの赤さやそこに吹いている風など、農のトータルな部分で食を感じてほしいと思っています。それが食べ物を作る人に向かう大きな力になっていると思います。世界は家族農業が主流です。農家がもうちょっと多くなっていかないと大変なことになると考えています。そういう意味で、市でも子どもたちに農を近づけてほしいと思います。農体験をやたらと増やしてほしいと思いますし、農の現場は迫力と楽しさがあると思っていますので、食育とずれる部分があるかと思いますが、真剣に思っています。

佐渡に友人がおりまして、佐渡の地域行事は農業とつながっているものばかりで、農業の衰退とともに、文化も衰退してきているそうです。上越もすばらしい食を育む土壌、農業を大切にしてほしいと思っています。

小林委員：JAえちご上越の小林です。JAでは、農業から食育ということでやっています。私たちの地域ふれあい課では、現在も若い世代に対して食育は大切だということをやっていますが、私たちの中でも課題であります。今までも小学生を対象とした親子活動をやっていますが、来年度は、もう少し広げていくことを検討し

ています。

その他に子育て世代 20 代、30 代に向け、次年度は今まで以上にこちらから訴えかけることを検討しています。なかなかこういった世代向けの行事を組むと、集まってくる人は関心がある人です。関心がない人にどうアプローチしていくかが難しいところです。

このアンケートの中で、「食事を楽しんでいる」項目で、1 割以上の人がそうではないと答えているということは、食べることに興味がないのではないかと思いました。食に関心がなければ、食育にも向かないかと思いました。食べることは楽しいことだという基本的なところだと感じました。そういう楽しみも伝えていきたいと思います。

地域ふれあい課としてできることは、現在も依頼があると出向いて講座をやっていますが、小学校だと田んぼ、畑をやっていて、JAの営農指導員がお手伝いをしています。そこで採れた野菜や大豆を食べるとなると、私たちが豆腐にしましょうか、米粉で料理を作りましょうかなどでお手伝いしています。また、お声掛けいただければと思います。

笹原委員： 市民委員の笹原です。私は受け取る立場で意見を言わせていただきますと、まず、アンケートで若い世代で回答数が低かったのは、忙しいから。私もこのアンケートがきたら、答えないだろうなという気持ちがありました。私の子どもは8歳と6歳で、午前中パートをされていて、主人も働いております。周りにもそういう家庭が多くありまして、皆さん土曜も日曜も忙しいようです。

お友達と一緒に遊んでスナック菓子をたくさん食べて夕飯が食べられない、それで済ませてしまう家庭もありますし、お母さんがじっくり食育を考える、学ぶ、情報を集める時間、体力がないのではないかと思います。私自身も学校や幼稚園から配られたものも後で見ると言って、見ない時もあります。食育をその世代に落とし込むということは、難しいと実感するところです。

ただ、アンケートの中で食育に関心がある理由をみると、「子どもの心身の健全な発育に必要なだから」が平成 29 年度も 30 年度も 50%を超えています。自分のことよりも我が子のこと、子どもがこれで健康になるなら、アトピーが治るなら、すくすく成長してくれるんだったら、というところになると、パワーが出る

こともあると思います。

小学校、幼稚園の行事ですと、行ってあげたいという気持ちもありますので、食育の推進、講座をしたりするのであれば、参観日に合わせてするのもいいのかなと思います。現に子どもの通う小学校の参観日に、野口先生からご講演いただき、そこには多数の保護者も参加しておりました。その時にいただいた資料でその後、家族と話をすることもありました。ただ、それが実践として各家庭で行われたかという点と難しいかと思いますが、そういった方法もあるのかなと思います。

あと、年代的に小学校に入ったら仕事をしようと思っているお母さん方が多くいます。乳幼児、幼稚園に入る前の時期は、健診等での話も真剣に聞きます。幼稚園に入ると、子どもの意志もあるから親の意見を押し付けないようにするケースもあります。幼稚園に入る前、年少などの小さいうちに親御さんに食育をしっかりと詰め込む場面もあったほうがいいと思います。3歳児健診などでの指導はとてもやさしいです。もう少し強く指導してもいいのかなと思います。

藤田委員： いくら保育園園長の藤田です。公立保育園では、数年前から食育に重点を置いて取り組んでおります。いくつかの取組をしていますが、すぐに結果は出ません。それでも小さい結果は出ています。緑の野菜を食べると元気になる、肉は筋肉になる、ご飯はいっぱい運動する力になるなど、子どもたちの頭の中に入っています。あと15年後お待ちください。この子どもたちに力を入れ始めて大きくなり、きっと関心と興味はどこかで花開く時が来ると思います。

子どもに指導をしても、頭には残りません。楽しくてよかった、うれしかったと心に残る取組を気負わずに簡単なことを心がけていこうという気持ちで行っています。幼稚園等の取組は分からないのですが、本来であれば、そこで同じような取組が進められればいいなと思っています。以後、子どもたちが関わる学校や団体で私たちが育てた食育についての関心や興味の芽をどうにか花開くようにしていただきたいと思っています。

保護者に対しては、年1回の健康教育講座、朝食の必要性、食育の便りなどで啓発はしているのですが、保護者の方にとってはとても忙しく、お父さんは食育に関心はありません。

また、働き盛りは市のホームページ、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌というところで情報を得ているようですが、若い方は市のホームページは見ません。私も子育てしている時は、テレビを見ていなかったなと思います。食育月間、食育の日を知らない人が多いですね。今、保育園で何ができるかなと考えた時に、啓発の部分ですけど、月間や食育の日があるよと知らせていないなと反省しました。日を知らせるのはとても簡単で、書いて渡せば知らせたことにはなりますが、どうして知らせるか、なぜ大切かを言わないと説得力がないと思います。栄養士、保健師との協力が必要だと思います。

3歳に入って保育園に行くと、保育園にお任せというところがあります。2歳半健診、3歳児健診で、もう少し食の大切さについて、保護者に指導をしてはどうかと思います。

池嶋委員： 高田北城高校の池嶋と申します。高校の代表みたいな形で出ささせていただいておりますが、今ほど、保育園のほうに全部教育をお願いしているのは難しい話ですし、その後の小学校、中学校、高校とその場で指導しなければいけないと感じました。

18、19、20歳は自立して自分で生きていく力をつける一番大事な時期だと思っています。積み上げられてきたものを高校の現場でしっかり教えてくことが大きなことかなと思います。

高田北城高校には生活文化科という家庭科に特化した専門学科がありまして、自慢できるくらい食育はやっています。その一つの例として、個人が家庭の課題を自分で探究して発表することをしてしています。それは、例えばお父さんが病気を持っていて、家族で治そうという取組を自分たちで考えて食事から変えていく取組などを実践的にやっています。

生活文化科では意識を持った取組を行っていますが、普通科はなかなか指導が十分にいかない部分があります。家庭総合という教科で全生徒が学ぶ中に食育が入っています。そこを軸にしながら、うちの学校だけでなく、全高校で意識を持って取り組んでいくことが大事かなと思います。

上越は「上越野菜」や「発酵のまち上越」といったほかの県や市に負けない食を軸にするいい地域であります。それらを子どもたちに教えながら、それを含め

ながら食生活を学ばせることが重要だと思います。それをバトンタッチして、社会人となればいいですし、連携できるようにがんばっていきたいと思います。

ある家庭科の全国大会に行きましたが、食育を含めた家庭科は「人生を幸せにする学び」だと言っておりました。まさに私たちがやらなければいけない取組だな思っているところです。

高橋委員： 食育が幅広く受け取れるのは幼稚園、保育園、小学校かなと思います。幼い子どもは素直に受け取ってくれますので、ねらい目はそこかなと思いました。

今の子どもは、食べ物はテーブルの上に置かれているもので、どこから来るか知らない、基本的にはスーパーですが、その前は農村だったり、圃場だったり子どもたちが知らないと思います。農村体験とか、食品工場とか、食べ物の製造過程を目にする体験が必要かと思います。

高校生が独り暮らしを始めた時、きちんとした食生活ができるだろうか、大学生の食生活の調査をしてみると目覚ましい食生活が見られるという現状があると聞きます。生活する段階で食事を自分でコントロールできない人が多いと思います。進学や就職を前にして、独立講座とか講習があればいいのではないのでしょうか。成績を上げたい、力を付けたいなど、食事が自分の身になるものと言え、実践につながるのではないかと思います。

中高年であれば、健診結果に問題がある場合、どういうものを食べれば解決できるか、自分で何ができるかという切り口で、今ある問題についてどうやっていけばいいかを、具体的に伝えれば身に付くかと思います。太りすぎて膝が痛い、そうすると太りすぎない食事、膝が痛くてもできる運動を組み合わせれば生活が楽になる。最近、スポーツ医の研修会に行ってきました。小中高校のスポーツ関係の生徒の面倒をみている栄養士さんの講演でした。成績を上げるには食事が圧倒的に重要である、練習も必要ですが、それ以前に食事がよくないとどれだけ練習をしても成績が上がらない。食事の記録を見ると、その子の成績が伸びるか、代表に残れるかが分かるそうです。受験でも頭が働く食事でアプローチができる。個別の具体的な情報を提供することが重要ではないかと思います。

野口会長： 私も一委員として、自分の環境の中で簡単に発言しておきたいと思います。今、高橋委員からもありましたが、昨年看護大学と上越教育大学の学生の食に関する

興味関心実態調査をしまして、県の上越保健所のご協力により、大学の枠を超えた調査ができました。その結果、看護大学よりも上越教育大学の学生の食生活の乱れが大きくデータとして取られました。それに基づきまして、個別栄養相談の実施、学生食堂のメニューの変更、朝ごはんを200円から100円に変えるなどの取組を行いました。

一つ皆さんにもお伝えしておこうと思ったことがあります。上越教育大学の学生の新生にレポートを書いてもらう時に、高校生、中学生、小学生と遡りながら小学校や中学校の給食のおいしさ、楽しさ、喜びなどの給食の思い出をレポートに書いてもらうことがあります。上越教育大学の学生は将来教師を目指して全国各地から来る学生たちですが、約半数は悲しい、つらい、しんどい思い出が給食の思い出です。また、前任校でも同様の結果でした。

今年度から12月に高田高校1年生6クラス、東京や関西に出ていくことが多い高校生に対し、勉強のために食が大切、自分で自分の食事を選ぶ、一人暮らしの中でできるようになっていくには、上越にいる残り2年間の中で母親、父親、おじいちゃん、おばあちゃんから調理を学びましょうという家庭で学ぶことの大切さ、部活におけるトレーニングの食事、試合の食事、疲労回復の食事、食文化のお話をさせていただきました。高田高校の高校生の給食の思い出はどんなものか、聞きましたところ、9割が楽しい思い出でした。これは、上越教育大学との違いを考えた時に、高田高校の高校生は、基本的には上越市近隣の子どもたちであるわけですから、その子たちは、上越の学校や保育園の給食に対しポジティブなイメージを持っています。食に対する興味・関心は、学校教育の中での市場の見学や商品開発、健康づくりの学びや、いろいろな形で食に触れ合ってきている上越の子どもたちの結果の表れとして、高田高校のアンケート結果につながっていると思います。

一方、上越教育大学は95%くらいが全国からの進学者でありますので、その違いがあるのかなと思います。これは、表に出せるデータではないので、どういう形でデータを市民の皆さんに伝えられるか、上越は食に対して、特に子育ての最中における食事の大切さを地域の大人が子どもたちに伝えることができている町であることを何とか広めていけたらいいと思っています。なかなか難しく、ア

ンケート云々だけでなく、アクションプランの中でも、申し上げましたが、件数でなく、人数、親子の参加、興味関心のアンケートが数パーセントでも上がる、小さなところであっても、食育の本来のねらいである、喜び、食への興味関心の高まりの部分をもっとピックアップし、そこを広めていける取組ができればと思います。私が個人としてできることには限りがありますので、例えば、今日お集まりの委員の皆さんのご協力はもちろんですが、今の小話を周囲に広めてもらうことでもいいと思います。食育の心温まるエピソードなど、上越の多くの方が取り組んでいる食育の成果を見ることも大切だと思います。

上野委員： 黒田小学校の上野です。いろいろな意見の中に子どもの教育という話が多々でまいました。20代30代へのアプローチとして小学校で出来ることは、自立した食生活を営める人を作る、意欲を持って卒業させる、中学校高校へつなげることが役割だと思っています。学校教育の中では様々な教科がありますし、食育については教科があるわけではなく、いろいろな教科の中に関連性を持たせて学習する教科横断型の学習でありますし、給食指導もその中に入っています。

1年生から6年生の間に生活総合の中の体験活動を入れたり、米づくりや野菜づくりを入れたり、料理を作ることで加工体験を入れたり、プロの料理人から教えてもらう、出汁の味をしっかりと教えてもらうなど、いろいろな活動を通して、6年間卒業までに総合的に食に関する知識や体験を増やしていく、特に低学年は収穫の喜びであったり、自分たちで作ったものを食べておいしい喜びであったり、そういう嬉しさを積み重ねることによって食育の良さを体感していくのだと思います。

5、6年生になると家庭科が入ってきます。その中の一部に食の領域がありますので、そこにおいてちゃんと理解が体系的にできる段階の中で、食品ロスや社会とのつながりの中での食が、中学になれば出てきますので、体型的な学習は教科の中でやりますが、その他については体験としてよさとして味わっていく、大変さも自分で労働することで味わっていく、それが最終的に一つにまとまってくるのが、卒業時であったり、中学卒業時であったり、大人になった時点でまとまっていけばいいかなと思っています。先を見た今の指導をしていく必要があるなと思っています。そうすることで、食に対する意識を持った20代30代の人たちが

活躍できると思っています。今を大切にしたいと思っています。

それから、学校教育の中で20代30代の人へ大切な話をしたい時に保護者がいないという場面は多々あります。新1年生の就学時健診の保護者会の時や移行学級の保護者会などで、1年生の保護者に対して大切な話をしています。それから、文化祭には多くの保護者や地域の方が来られます。そういうところで、市の方が来られて食育のコーナーを設定してPRをしたり、アンケートを取ったり、食育のデモンストレーションをしたりと集客の場として学校を使ってもらってもいいかと思えます。

アンケートの中で学校からの食育発信の認知度が低かったように思います。学校から食育月間、食育の日がどこで分かるかという給食便りです。栄養士さんたちが作ってくださって、市で統一のものが配られます。食育の日の献立の説明があって、それをきちんと読んでいる親御さんは少しずつ分かっています。または各学級で食に関する活動をした際は、学級だよりで活動の報告をします。親御さんが受け取る心を持っていただくことで、食に対する広がりができると思います。

学校としては、できることを一つ一つ取組み、意欲を育てる、そこに徹したいと思えます。

夏にオリンピック選手を指導する管理栄養士の方のお話を聞きました。勝ち飯の話の話を聞きました。体重を増やすために、間違った指導がなされる時がありますが、炭水化物だけとっても力は出ない、タンパク質を摂って、栄養もバランスよく摂らないと試合に出たときに持久力が続かないなど結果に出てきてしまう。選手が勝ちたいからこういう食材を食べる、計画的な意識に変わっていくと強くなったということです。食生活が生き方までも変えてしまったというお話を聞きました。ぜひ、そういう場で貢献できるような意欲を持った人を育てていきたいと思えました。

岩崎委員： 私の経験上、食育は財産づくりだと思っています。先日、大阪なおみ選手が優勝したのも、日本人の食トレーナーが影で支えていたと聞いています。今日ぜひ、お願いしたいことは、アクションプランの中に素晴らしいものがたくさんあって、施策関係については、ぜひ先ほど申し上げましたとおり、担当者が代わって

も恒久的に続けるというルール化を設けてほしいと思います。

野口会長： 本日、会議出席にあたり、事前に事務局から意見交換以外の意見がありましたらお願いしますという事でした。2 つほど意見が届いております。それでは松井委員からお願いします。

松井委員： アクションプランの 34 ページをご覧ください。家族の食育レシピコンテストの記載があります。小学生の部、最優秀賞の方のレシピについて、コンテストだけで終わらせるのではなく、学校給食のメニューに入れてもらえれば、自分と同世代の人が家族と考えたものだよとか、今度私も目指そうかなという意識付けになるのではないかと思います。

事務局： 学校給食担当に伝えておきたいと思います。

岩崎委員： 松井委員と同じで意識付けということで、スーパーなどからご協力いただいて、塩分ゼロの惣菜を作ってもらい、調味料関係を小袋に入れるなどして販売してはどうかと思います。そういった意識付けもいいのではいかと思いました。

事務局： 私どもも地産地消の面からもスーパーの皆さんからご協力いただいております。企業活動でもありますので、私たちがどのくらいできるかというところもありますが、そのような意見があったこととお話できるかなと思います。

野口会長： 確かに、まちを歩いていて、健康を意識する商品が並んでいると市民の皆さんの身近な普及にもなるのかなと思います。

それでは、意見交換という形で皆さんそれぞれのご意見を発言いただき、また今後の市の施策が進みますように、ただ、市役所をお願いをするだけでなく、食育は市民それぞれが伝えていくことが大切だと思います。私たち自らが広めていかなくてはいけないと思っています。私も含め、平成 31 年度もより広く市民の方向けの情報発信、一緒に連携をして取組を広めていくことに力を注いでいけたらと思います。

それでは、進行を事務局にお返ししたいと思います。皆様ご協力ありがとうございました。

事務局： 野口会長ありがとうございました。委員の皆様も長時間に渡りありがとうございました。それぞれのお立場から現場の声をお聞かせいただきました。これまで食育推進会議は、こういった意見交換の場を設けることができませんでした。今

回、お一人お一人からご意見をいただき大変参考になりました。本日いただきましたご意見は、事務局で検討しまして、今後の食育推進施策に反映させていただきたいと思います。また、これに限らず、皆様からも食育の実践の環が広がる取組の推進にご協力を賜りますようお願い申し上げます。

それでは、次第「4 その他」に移ります。委員の皆様から情報提供等がありましたらお願いします。

特にないようですので、皆様、長時間に渡り、積極的なご発言と貴重なご意見を賜り誠にありがとうございました。以上で平成30年度第2回上越市食育推進会議を終了いたします。本日はありがとうございました。

問合せ先

農林水産部農村振興課

TEL : 025-526-5111 (内線 1812)

E-mail : nouson-shinkou@city.joetsu.lg.jp

その他

別添の会議資料も併せてご覧ください。